REPORT②

小学生の親の芸術教育や美術館に対する意識

研究開発室　的場 康子

目次

１．はじめに…… 17
２．小学生の親の芸術教育に対する意識…… 18
３．小学生の美術館利用状況…… 19
４．子どもが利用しやすくなるために美術館に対し期待すること…… 25
５．まとめ …… 26

要旨

① 近年の社会状況の変化により、美術館をめぐる環境も変わりつつある中で、教育普及活動を多角的に行うことで、子どもを含め、利用者拡大を目指す動きもある。本稿では、小学生の親に対するアンケート調査により、親の芸術教育に対する意識及び子どもの美術館利用の実態や意識を明らかにし、子どもをはじめ、多くの人に利用されるような美術館のあり方を考える。

② 調査の結果、「芸術を楽しむこと」を身につける場として、「学校」に期待する割合が他の科目に比べて低く、相対的に「家庭等の学校以外」で身につけるべきと思っている人が多かった。また、小学校における芸術教育に対する満足度をみると、「歌や演奏等の指導」では、満足している割合が７割以上であるのに対し、「美術の鑑賞教育」は４割に満たない。

③ 美術館の利用実態をみると、子どもと一緒に足を運ぶ人の方が少数派だった。しかしながら、足を運ばない人を含め、利用しやすい美術館となるための要望として、多くの親が「楽しめるようなイベント」、すなわち美術館による多彩な教育普及活動を望んでいることが示された。

④ 実際、美術館を親子で利用している人の４割弱が、親子で教育普及活動に参加した経験があると回答している。そして、そのほとんどが、期待通り、子どもと一緒に楽しいときを過ごすことができたことに満足している。中には、「子どもの心の成長」や「芸術鑑賞に興味をもつきっかけとなる」等の教育的効果も示されている。このようなことから、今後、教育普及活動を受け皿として、子どもたちへの芸術教育に寄与し、子どもたちに開かれた美術館が増えることは、多くの育児世代の期待に応えることにもつながるといえよう。

キーワード：美術館、教育普及活動、芸術教育

1. はじめに

(1)本調査の背景

美術館は大人のものというのが一般の認識であろう。ところが、近年の社会状況の変化により、美術館をめぐる環境が変わりつつある。

例えば、近年の厳しい財政事情や、少子化による入館者数の減少等に直面し、多くの美術館は存続の危機に迫られているが、このような状況を克服し、存在意義を示すための活路として、「教育普及活動」に力を入れる美術館が目立つようになった。従来、美術館における教育普及活動といえば、多くは作品の「展示」に留まっていた。ところが最近では、展示した作品の鑑賞方法を解説する「ガイドツアー」や、創作を体験する「ワークショップ」等、参加者が自ら体験できる「参加型」の教育普及活動（イベント）を行う美術館が増えてきた。このように教育普及活動を多角的に企画することで、あまり美術館になじみがない人でも、気軽に利用できるような受け皿を用意し、利用者の拡大を目指しているのである。

しかも、少子化対策に国を挙げて取り組んでいる中、次世代育成の一環として美術館には、子どもの文化活動を支えるという役割が期待されている。そのため、多くの美術館において、「教育普及活動」のターゲットが大人から子どもに広がりつつある。

さらに、学校教育の場における変化もある。1998年に改訂された学習指導要領（2002年４月１日施行）に、美術（図画工作）の授業内容として、「地域の美術館を活用した鑑賞教育の充実」が明示された。そのため、子どもたちの「鑑賞教育」*1の場として美術館を「活用」するために、学校と美術館との緊密な連携が必要とされることとなった。このように、従来は「大人向き」であった美術館が、「教育普及活動」を充実させて、子どもたちを受け入れる態勢を整えることが求められるようになったのである。

しかしながら他方、このような美術館の教育普及活動や学校教育の動きに対して、子どもやその保護者は、どのような評価をしているのか。実際に、子どもにとって美術館が「なじみやすい存在」となっているのか。また、美術館が「なじみやすい存在」となるためには、何が必要なのか。本稿では、このような観点から、育児世代（小学生の親）に対するアンケート調査により、親の芸術教育に対する意識及び子どもの美術館利用の実態を明らかにする。このことを通して、子どもの美術館利用の背景にある親の意識や要望を浮き彫りにし、時代の要請に適い、子どもを含め多くの人に利用されるような美術館のあり方を考える。

(2)調査の実施概要

調査の実施概要は図表１の通りである。調査の回答者は小学生を持つ家庭の保護者（図表２）であるが、実際の質問は、その家庭の「小学生」（小学生が複数いる家庭については「学年が最も低い子ども」）に対する教育観や美術館利用状況等をたずねてい

る。回答の対象となった小学生の属性について、性別にみると、男児297人（全体の48.5%、以下同様）、女児308人（50.3%）であり、学年別にみると、１年生110人（18.0%）、２年生120人（19.6%）、３年生107人（17.5%）、４年生105人（17.2%）、５年生71人（11.6%）、６年生89人（14.5%）となっている（図表省略）。

なお、母親の就業状況をみると、専業主婦である割合が44.3%、パート・アルバイトが42.0%、会社員・公務員が8.2%、自営・自由業が4.1%である（図表省略）。

図表１　アンケート調査の実施概要

調査時期	2006年12月
調査対象	全国の小学生の子どもを持つ保護者（当研究所生活調査モニターより抽出）
調査方法	郵送調査法
サンプル数	配布数：664名　　有効回収数：612名（有効回収率：92.2%）

図表２　回答者の属性(性・年齢別)

		全体	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代	無回答
全体	（人）	612	5	280	298	28	1
	（%）	100.0	0.8	45.8	48.7	4.6	0.2
男性	（人）	161	0	41	101	19	0
	（%）	100.0	0.0	25.5	62.7	11.8	0.0
女性	（人）	450	5	239	196	9	1
	（%）	100.0	1.1	53.2	43.7	2.0	0.0
無回答	（人）	1	0	0	1	0	0
	（%）	100.0	0.0	0.0	100.0	0.0	0.0

２. 小学生の親の芸術教育に対する意識

（1）芸術教育はどこで身につけるべきか

小学生を持つ親は、芸術教育に対してどのような意識を持っているのだろうか。

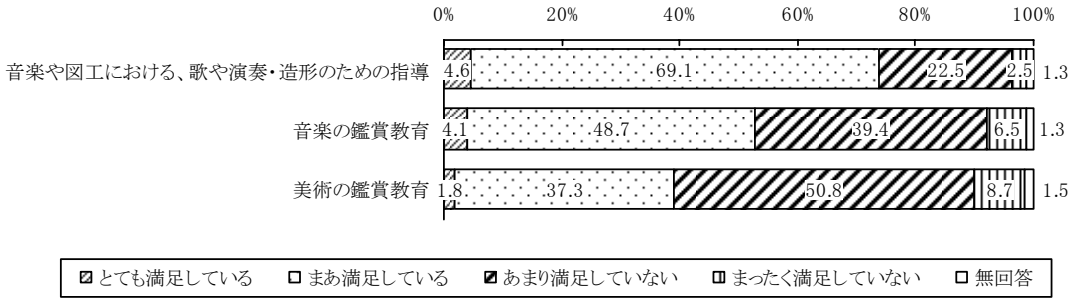
まず、「芸術（美術や音楽など）を楽しむこと」は、学校教育の中で身につけるべきか、それとも家庭等の学校以外で身につけるべきかをたずねたところ、「学校」（「主に学校」9.5%と「どちらかといえば学校」38.6%の合計、以下同様）に期待する割合（48.1%）よりも、「家庭等の学校以外」（「主に家庭等の学校以外」8.7%と「どちらかといえば家庭等の学校以外」41.8%の合計）で身につけるべきとの回答割合（50.5%）の方が若干高いものの、ほぼ同率である（図表省略）。「国語、算数、理科、社会等の教科の基礎学力」（「学校」で身につけるべきとの回答割合94.8%）や「周りの人との関係をうまく作ること」（同87.2%）、「運動能力」（同69.1%）には、学校に期待する割合が約７割以上であることを考えると、「芸術教育」については相対的に、学校への

期待度が低く、学校以外で身につけるべきと思っている人が多いことがうかがえる(図表省略)。

(2)芸術教育に対する満足度

次に、親は子どもが通う小学校における芸術教育に、どの程度満足をしているのだろうか。「音楽や図工における、歌や演奏・造形のための指導」に対しては、７割以上が満足している（「とても満足している」と「まあ満足している」の合計）と回答している(図表３)。他方、「音楽の鑑賞教育」の満足度は約５割、「美術の鑑賞教育」の満足度は約４割である。同じ音楽や図工でも、「実演」や「実技」の指導に比べ、「鑑賞教育」に対する満足度は低いことがわかる。

図表3　小学校における芸術教育に対する満足度



3. 小学生の美術館利用状況

(1)子どもと一緒に美術館に行く人の割合

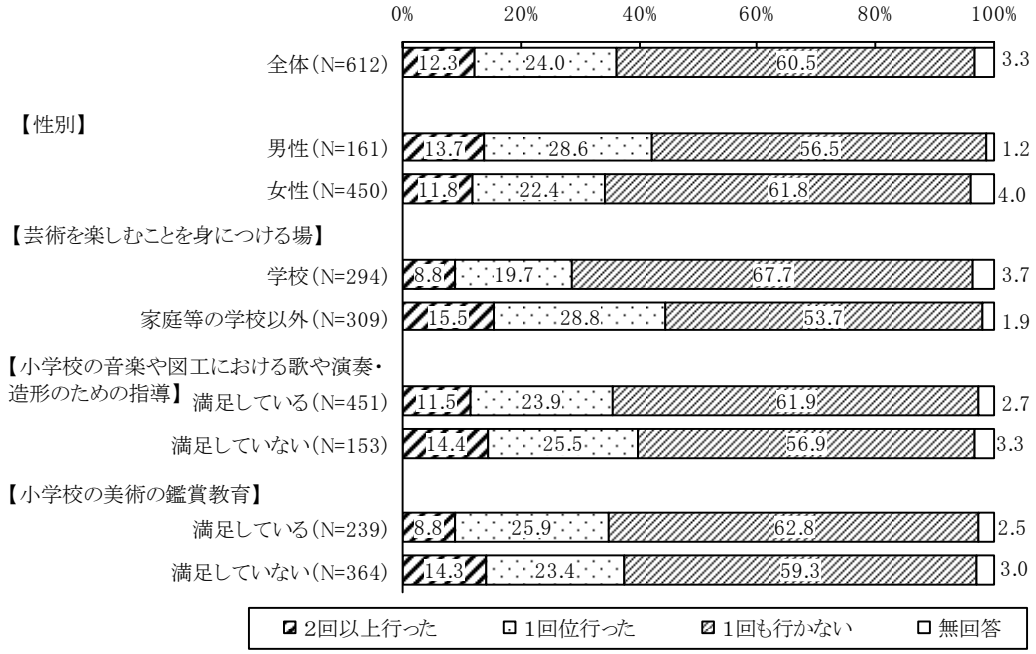
次に、小学生の美術館の利用状況をみてみよう。

この１～２年間に、子どもと一緒に美術館に行ったことがあるかをたずねたところ、全体では「１回以上行った」（「２回以上行った」と「１回位行った」の合計）が４割弱、「１回も行かない」が約６割であり、「行かない」という割合の方が高い(図表４)。

性別でみると、「１回以上行った」の回答割合は女性よりも男性の方が高い。つまり、母親よりも父親の方が子どもと一緒に美術館に足を運ぶ人が多いようだ。

また、芸術教育に対する意識との関連をみると、芸術(美術や音楽等)を楽しむことを身につける場として「学校」に期待する人よりも、「家庭等の学校以外」で身につけるとしている人の方が、子どもと一緒に美術館に足を運ぶ割合が高い。さらに、学校教育における芸術教育に対する満足度との関連をみると、「小学校の音楽や図工における歌や演奏・造形のための指導」についても、「小学校の美術の鑑賞教育」についても、「満足していない」としている人の方が、子どもと一緒に美術館に足を運ぶ割合が高い。

図表４　この１～２年間に子どもと一緒に美術館に行った人の割合（性別、芸術教育に関する意識別）



注：【小学校の音楽や図工における歌や演奏・造形のための指導】と【小学校の美術の鑑賞教育】における「満足している」は「とても満足している」と「まあ満足している」の合計であり、「満足していない」は、「あまり満足していない」と「まったく満足していない」の合計である。

（2）親の美術館に対する意識と子どもと一緒に美術館に行く頻度との関連

この１～２年間に子どもと一緒に美術館に「１回以上行った」人と「１回も行かない」人において、親自身の美術館とのかかわり及び美術鑑賞に対する意識がどのように異なるかをみると、子どもと一緒に美術館に「１回以上行った」人の方が「１回も行かない」人よりも、「現在、美術鑑賞をすることに興味がある」、並びに「現在の生活において、美術館に、たびたび足を運ぶ」への回答割合が20ポイント以上高い（図表５）。子どもと一緒に美術館に足を運ぶ人は、親自身に美術鑑賞や美術館に興味がある人が多いことがわかる。また、「子ども時代、親に美術館に連れて行ってもらった」への回答割合についても、子どもと一緒に足を運ぶ人の方が10ポイント以上高いことを踏まえると、子ども時代の経験からも影響を受けていることもうかがえる。

ただし、「１回も行かない」という人でも、約４人に１人の割合で「美術鑑賞に興味がある」としており、ここ数年は足を運んでいなくても、美術鑑賞に対して、潜在的なニーズは少なからずあることがうかがえる。

図表5　親の美術館とのかかわり及び美術鑑賞に対する意識（子どもと美術館に行くことの有無別）
＜複数回答＞

（単位：%）

	現在、美術鑑賞をすることに興味がある	現在の生活において、美術館に、たびたび足を運ぶ	子ども時代、親に、美術館へ連れて行ってもらった	子ども時代、学校で、美術館へ連れて行ってもらった
１回以上行った（N=222）	54.1	25.2	26.6	23.9
１回も行かない（N=370）	25.7	2.2	14.9	26.2

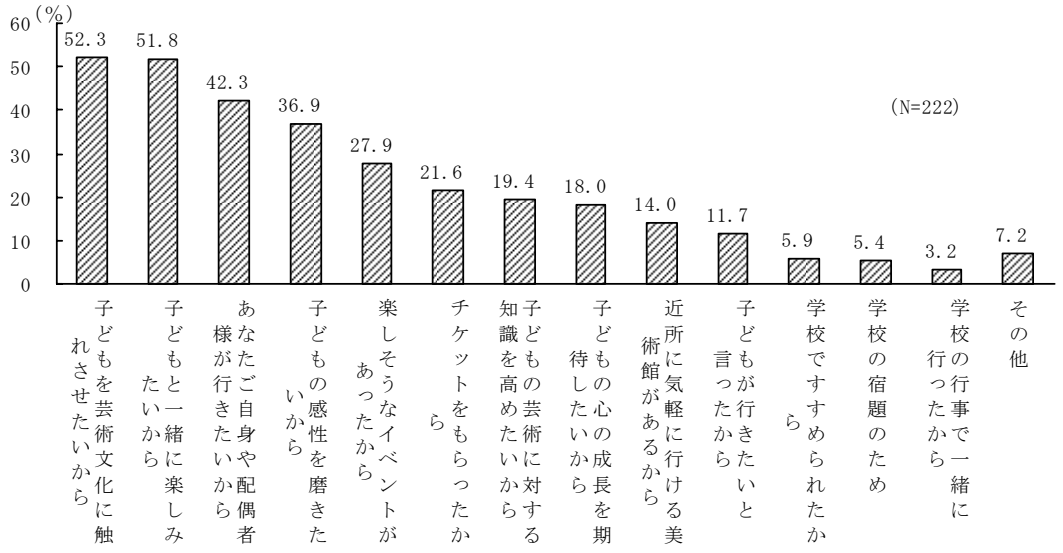
注：「１回以上行った」は、「あなたは、この１～２年間に、『お子さま』と一緒に美術館に行きましたか」への質問に対し、「２回以上行った」と「１回位行った」の回答割合の合計である。

（3）子どもと一緒に美術館に行く理由

この１～２年間に子どもと一緒に美術館に「１回以上行った」と回答した人に対して、その理由をたずねたところ、「子どもを芸術文化に触れさせたいから」（52.3%）、「子どもと一緒に楽しみたいから」(51.8%)、「あなたご自身や配偶者様が行きたいから」（42.3%）が上位３位となっている（図表６）。「子どもの感性を磨きたいから」(36.9%) が第４位と続くが、このような「子どもの教育目的」と同じくらいの割合で、「自分が楽しみたい」ために子どもと一緒に美術館に足を運ぶ人が多いことがわかる。

「学校ですすめられたから」や「学校の宿題のため」、「学校の行事で一緒に行ったから」といった、「学校関連」の項目への回答割合は低いことから、子どもと一緒に美術館に行くのは、家庭の自発的な行動によるものが多いことがうかがえる。

図表6　子どもと一緒に美術館に行く理由＜複数回答＞



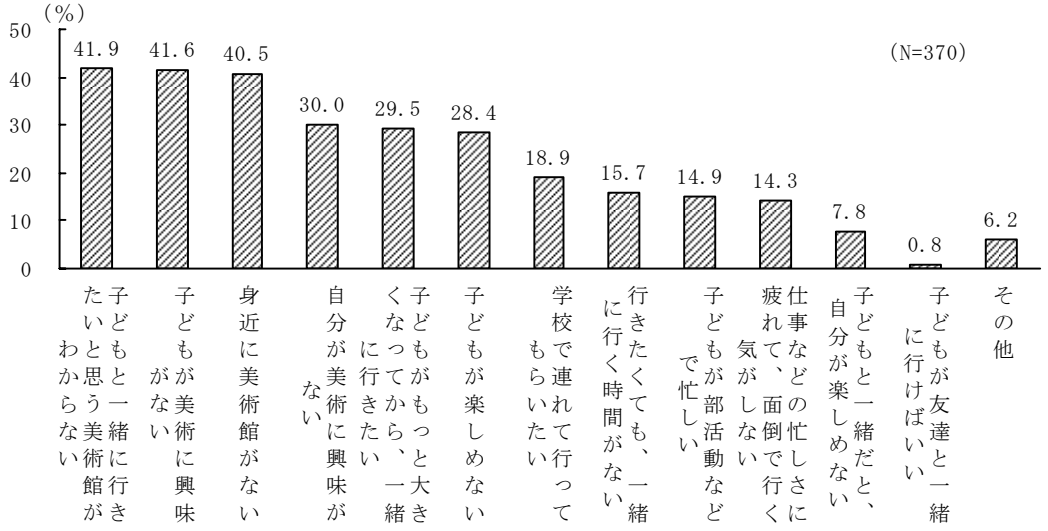
注：この１～２年間に、子どもと一緒に美術館に「２回以上行った」と「１回位行った」の回答者が対象

(4)子どもと一緒に美術館に行かない理由

他方、この１～２年間に、子どもと一緒に美術館に「１回も行かない」と答えた人を対象に、その理由をたずねた結果、「子どもと一緒に行きたいと思う美術館がわからない」(41.9%)、「子どもが美術に興味がない」(41.6%)、「身近に美術館がない」(40.5%) がほぼ同率で上位３位である(図表７)。

この結果をみると、美術館との心理的距離を縮めるために、美術館からの「効果的な」情報提供が必要であることがうかがえる。現実には、多くの美術館は情報提供をしていることであろう。しかしながら、育児世代に確実に届くような情報発信の「工夫」が求められているといえる。例えば、学校との連携に基づき、学校の担任の先生を通して、美術館のイベントについての案内を子どもに配布したり、インターネットのホームページに詳しいイベント情報を掲載したりする等の工夫を行っている美術館もある。美術館に対する親しみ感を高め、子どもを含め多くの人にとって身近な存在になるためには、「情報提供の工夫」が一つの鍵を握っているといえよう。

図表7　子どもと一緒に美術館に行かない理由＜複数回答＞



注：この１～２年間に、子どもと一緒に美術館に「１回も行かない」の回答者が対象

(5)教育普及活動への参加状況

以上が、小学生親子の美術館利用状況、並びに意識である。次に、「はじめに」で述べたように、多くの美術館において導入され始めている「教育普及活動」(すなわち、鑑賞教室、ワークショップ、映画、コンサート等のイベント) への子どもの参加状況についてみてみよう。

1）子どもの参加経験

まず、子どもの教育普及活動への参加経験をたずねたところ、「家族で美術館に行って、参加したことがある」（以下「家族参加」）が15.5%、「子どもが１人で、あるいは友達と、参加したことがある」（以下「子ども参加」）が3.6%、「学校で連れて行ってもらって、参加したことがある」（以下「学校参加」）が8.2%で、「全く参加したことがない」（以下「不参加」）が74.5%であった（図表８）。

子どもと美術館に行くことの有無別にみると、子どもと一緒に美術館に行く層の４割弱が、家族で美術館に行って参加したことがあると回答している。

親の教育観と参加経験との関連をみると、芸術(美術や音楽等)を楽しむことを身につける場として、「学校」に期待する人よりも、「家庭等の学校以外」で身につけるとしている人の方が、「家族参加」及び「子ども参加」の割合が高い。また、学校における芸術教育の満足度別にみると、「小学校の音楽や図工における、歌や演奏・造形のための指導」に「満足していない」人の方が「家族参加」「子ども参加」ともに割合が高い。「小学校の美術の鑑賞教育」については、「満足していない」人の方が「家族参加」の割合は低いが、「子ども参加」の割合は高くなっている。このようなことから、家族、あるいは子ども参加によって教育普及活動に参加することで、子どもへの芸術教育を補完する意向があることがうかがえる。

図表8　教育普及活動への参加経験

（単位:%）

	参加したことがある＜複数回答＞			全く参加したことがない
	家族で美術館に行って参加したことがある	子どもが１人で、あるいは友達と参加したことがある（学校行事以外）	学校で連れて行ってもらって参加したことがある	
全体（N=612）	15.5	3.6	8.2	74.5
【子どもと美術館に行くことの有無】				
１回以上行った（N=222）	36.5	7.7	10.4	52.3
１回も行かない（N=370）	3.0	1.1	6.8	89.2
【芸術を楽しむことを身につける場】				
学校（N=294）	11.9	1.7	9.2	77.9
家庭等の学校以外（N=309）	19.1	5.2	7.1	71.8
【小学校の音楽や図工における、歌や演奏・造形のための指導】				
満足している（N=451）	14.6	3.3	8.4	75.2
満足していない（N=153）	18.3	3.9	7.8	73.2
【小学校の美術の鑑賞教育】				
満足している（N=239）	16.7	2.1	9.2	73.6
満足していない（N=364）	14.8	4.4	7.7	75.3

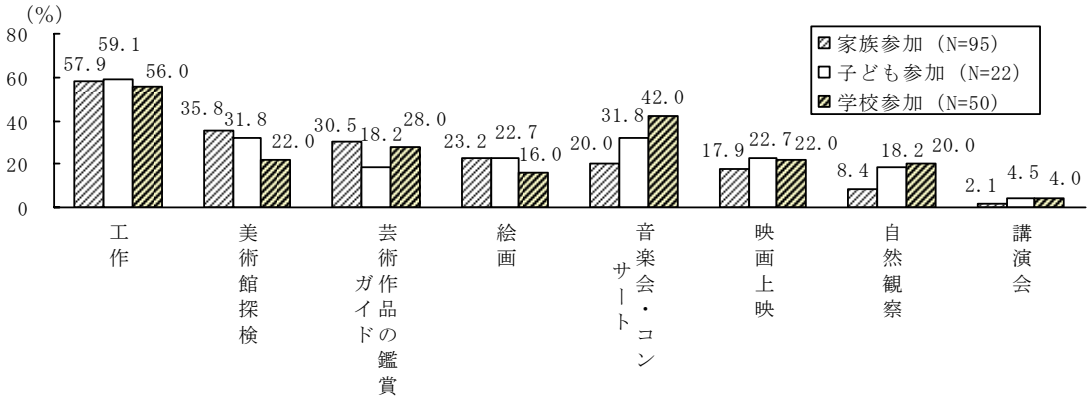
2）参加したことのある教育普及活動の内容

概して、大人を主な対象とした美術館の教育普及活動としては、「鑑賞ガイド」や「講

演会」が一般的であるが、子どもを対象とする場合には、「工作」や「探検」等、子どもでも親しみやすいような内容を用意する傾向がある。このことを踏まえて、子どもを対象とした主なイベント内容を回答項目に掲げ、教育普及活動に子どもが参加したことのある人を対象に、実際に参加した内容をたずねた結果が図表９である。いずれの参加形態でも、「工作」（粘土や紙、木などを使って、自分で、あるいはみんなで作品を作る）への回答割合が最も多い。

第２位以下は、参加形態によって異なる。「家族参加」の場合は、「美術館探検」（クイズ形式などを取り入れたものも含む）、「芸術作品の鑑賞ガイド」（芸術作品についての解説）への回答割合が３割以上となっている。「子ども参加」の場合は、「美術館探検」と「音楽会・コンサート」が同率で第２位である。「学校参加」の場合は、「音楽会・コンサート」、「芸術作品の鑑賞ガイド」の順である。

図表9　参加したことのある教育普及活動の内容（参加形態別）＜複数回答＞



注：本調査では、教育普及活動の参加の有無をたずねる際に、実態に即して「家族参加」「子ども参加」「学校参加」「不参加」の４項目を立て複数回答により回答を求めた。したがって、回答者の中には「家族参加」「子ども参加」「学校参加」のうち複数項目を回答している人もいる。ちなみに、この３項目のいずれかに回答した人（参加形態を問わず「参加したことがある」人）は、148人となっている。

3）教育普及活動に対する評価

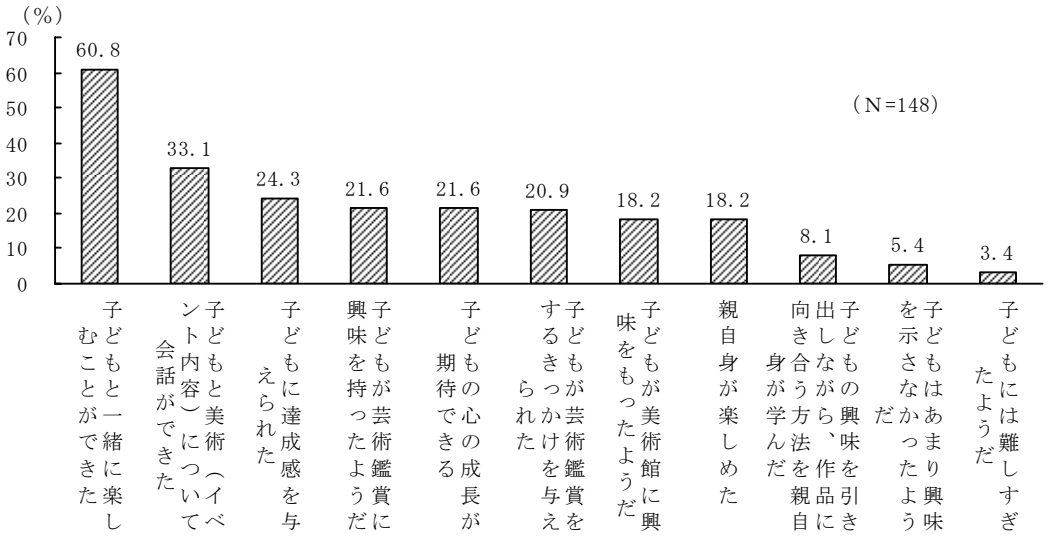
このような美術館における教育普及活動に対して、子どもに参加させた経験のある親はどのような評価をしているのであろうか。「家族参加」、「子ども参加」、「学校参加」のいずれかによって参加させたことによる子どもへの効果及び感想についてたずねたところ、「子どもと一緒に楽しむことができた」が最も多く60.8%、次いで「子どもと美術（イベント内容）について会話ができた」が33.1%、「子どもに達成感を与えられた」が24.3%で上位３位となっている（図表10）。

ちなみに回答項目ごとに参加形態別回答者の特徴をみると、「子どもと一緒に楽しむことができた」は、「家族参加」者から多く寄せられており、「子どもが芸術鑑賞に興味を持ったようだ」と「子どもの心の成長が期待できる」はともに、「子ども参加」

者からの回答割合が高い（図表省略）。

また、「子どもが芸術鑑賞をするきっかけを与えられた」は、他の参加形態に比べ、「学校参加」者からの回答割合が高い傾向がある。学校で連れて行ってもらった人は、「芸術鑑賞のきっかけ」として教育普及活動を評価していることがうかがえる。前述のように、子どもと美術館とのかかわりは、親の意識に依存する部分が大きいが、学校で美術館に行くことによって、親の意識にかかわらず、幅広く子どもたちを美術館と結びつけることができる。したがって、美術館と学校との緊密な連携を行い、「学校参加」を可能とすることが、子どもが美術館に出会う機会を広げるために必要な要素であるといえよう。

図表10　教育普及活動による子どもへの効果・感想＜複数回答＞



注：参加形態を問わず、教育普及活動に参加したことがある人が対象（図表９の注を参照）

4. 子どもが利用しやすくなるために美術館に対し期待すること

最後に、「子どもの利用のしやすさ」という観点から、美術館に対し、小学生の親はどのようなことを期待しているのであろうか。このような美術館に対するニーズについて、子どもと一緒に美術館に足を運ぶ人と運ばない人とを比較し、特に足を運ばない人のニーズを浮き彫りにすることで、多くの人が利用しやすい美術館になるためのヒントが得られるものと思われる。

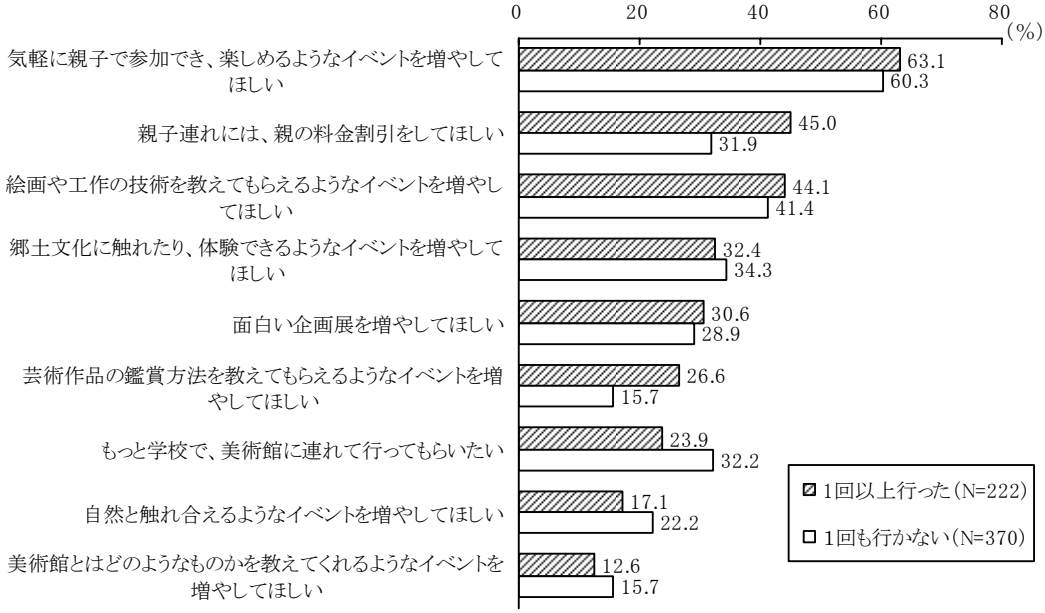
調査結果をみると、足を運ぶ人も、運ばない人も、「気軽に親子で参加でき、楽しめるようなイベントを増やしてほしい」への回答割合が最も高い（図表11）。美術館が多くの人にとってなじみやすいものとなるためには、作品の「展示」のみにとどまらず、楽しめるような「イベント」（すなわち、先述したような教育普及活動）を企画するこ

とが求められていることがうかがえる。

利用状況によって回答割合の差が目立った項目をみると、まず、美術館に「１回以上行った」人からは、「親子連れには、親の料金割引をしてほしい」といった経済的負担の軽減についての要望に加え、「芸術作品の鑑賞方法を教えてもらえるようなイベントを増やしてほしい」に多くの回答が寄せられた。ここでも、子どもへの芸術教育のために、学校教育の補完として美術館を利用したいとする意向がうかがえる。

反対に、美術館に「１回も行かない」人からは、「もっと学校で美術館に連れて行ってもらいたい」に多くの回答が寄せられており、前述のように、学校利用を促進することが、子どもの利用機会を広げることにつながることが示された。

図表11　子どもが利用しやすくなるために美術館に期待すること（美術館へ行く頻度別）
＜複数回答＞



5. まとめ

以上、小学生の親の芸術教育観及び子どもとの美術館利用状況や意識についてみてきた。芸術教育は、学校のみでなく、家庭や学校以外においても行うべきであると考える人が多いことが示された。その学校以外の教育の場の一つとして、美術館に期待が寄せられていることがうかがえる。そのため、美術館は子どもに対する芸術教育の担い手としての自覚を持ち、子どもが利用しやすいような工夫を行うことが必要である。

他方、依然として美術館は敷居が高く、足を運ばない層が多いことも明らかとなっ

た。しかしながら、足を運ばない層を含め、利用しやすい美術館となるための要望として、多くの親が「楽しめるようなイベント」、すなわち美術館による多彩な教育普及活動を望んでいることがわかった。

実際、美術館を親子で利用している人の４割弱が、親子で教育普及活動に参加した経験があると回答している。そして、そのほとんどが、期待通り、子どもと一緒に楽しいときを過ごすことができたことに満足している。中には、教育普及活動の子どもへの効果として、「子どもの心の成長」や「芸術鑑賞に興味をもつきっかけとなる」等の教育的効果も示されている。

このようなことから、今後、教育普及活動を受け皿として、子どもたちへの芸術教育に寄与し、子どもに開かれた美術館が増えることは、多くの親の期待に応えることにもつながるといえよう。

美術館は、子どもにとって、芸術教育のみならず、心の教育にも、そして楽しく過ごす場としても寄与する可能性を秘めている。時代の要請に応え、美術館のあり方も変わっていくべきものである。今後もそのあり方に注目したい。

（研究開発室　主任研究員）

【注釈】

*1　最近では、ニューヨーク近代美術館等、欧米の美術館からの影響を受け、「対話形式」による鑑賞教育を導入する美術館も増えてきた。すなわち、美術館の「解説者」が一方的に作品解説を行うのではなく、一緒に作品を見ながら、鑑賞者が「考える」きっかけをつくるための「問いかけ」を行うのである。そして、鑑賞者が自分で見て考えたことを、「解説者」や友人などに伝えるとともに、他の人の考えにも耳を傾ける。このように、作品を介して「見る、考える、話す、聞く」という一連の行為を行うというのが「対話形式」の「美術鑑賞」である。このような鑑賞方法は、作品に対する造詣を深めるにとどまらず、人間同士の「コミュニケーション」を学ぶ手段としても有効とされており、子どもたちの「生きる力」の育成にもつながると考えられている（上野行一監修 2001)。美術鑑賞を通して人間的成長に働きかける、このような「鑑賞教育」の確立は、まさに、芸術教育における大きな転換点であり、美術館が次世代育成に寄与するものとして、子どもの「生きる力」に目を向け始めたといえる。

【参考文献】

・上野行一監修，2001,『まなざしの共有―アメリア・アレナスの鑑賞教育に学ぶ』淡交社.
・的場康子，2006,「育児世代の美術館・博物館の利用実態」『Life Design Report(2006年11-12月号)』第一生命経済研究所：４-15.